

あとがきに代えて —本誌が次の災害に生きるために—

東北大学災害科学国際研究所 佐藤翔輔

「アフターアクションレポート」という言葉をご存知でしょうか。これは、災害対応を実際に体験した組織が取りまとめる対応記録のことを表します。これは、単なる災害対応の記録ではありません。元谷らによれば、実際の活動にもとづく「体系的な記録」であり、かつ、実際の活動を通じて得た「知見・教訓」を述べている対応記録のことを「アフターアクションレポート」と言います。

アフターアクションレポートは、2つの重要な役割を持っています。一つは、「自分たちのため」です。アフターアクションレポートを作成すれば、災害対応マニュアルを新たに作成、もしくは既存マニュアルを見直し・改善するのに多に役立ちます。さらには、災害対応訓練において、それそのものが状況付与(事態の状況を情報として訓練参加者に示すこと)の材料になります。言わば、これは「自分たちのために、次の災害に備える」といった位置づけです。もう一つは「ひとのため」です。多くの人は、2回以上災害を経験することはあまりありません。多くの人が「ぶっつけ本番」からスタートする状況の中では、「先人に学ぶ」ことが最も効果的な学びになります。アフターアクションレポートを作成することは、「災害対応を経験した先輩としての責任」と言うこともできます。

2012年秋に、七ヶ浜町社会福祉協議会さん、ならびに七ヶ浜町ボランティアセンターさんから、「東日本大震災の対応を『記録』として残したい」という言葉をいただきました。まさに、それはアフターアクションレポートだと思いました。前述の「責任」に対する気概を感じ、この度、記録化・記録誌作成のためのご支援をさせていただきました。

七ヶ浜町ボランティアセンターのような組織が、その実活動を記録化することには、以上のような役割のほかにも、もう一つ重要な意味があります。Quarantelliらによれば、災害対応組織は「組織構造(structure)」と「機能(task)」の軸で整理されます。これは、組織構造が「日常とは変化がない(old)、日常とは変化がある(new)」、機能が「日常からある(regular)、日常にはない(non-regular)」で整理されるというものです。災害時に立ち上がるボランティアセンターは、組織構造で言えば、日常とは変化がある(new)、日常にはない(non-regular)という創発型の組織であると言えます。このような創発型の組織は、期間(時間)・ヒト・モノ・カネのいずれも「有期」であるという制約があります。災害発生時には、ボランティアセンターをはじめとした様々な組織が立ち上がるにも関わらず、以上の制約のために、「一連の活動を終えての記録」、まさにアフターアクションレポートが残りにくいという現状があります。アフターアクションレポートの作成にも、時間・ヒト・モノ・カネといった資源が必要なのは言うまでもありません。七ヶ浜町ボランティアセンターによるアフターアクションレポートの作成は、その作成過程が災害時の創発型組織にとってのアフターアクションレポート作成モデルにもなりえます。つまりは、災害時の創発型組織の実態を後世に残せるケースが増える、といった期待がここにあります。

災害対応を学ぶ、ということにおいては、災害対応の実際の経験に学ぶことに勝る方法はありません。記録誌(アフターアクションレポート)として、経験をまとめていただいた七ヶ浜町ボランティアセンターに最大の敬意を表します。また、本記録化プロジェクトの実現は、永村美奈さん(2014年4月現在、九州大学大学院修士課程)による実務支援なしでは語れません。同氏への感謝とともに筆を置きます。

文献

元谷豊, 林春男, 重川希志依, 牧紀男, 田村圭子, 田中聡, 木村玲欧: 効果的な活用を可能とする災害対応記録のあり方及びその作成手法の提案—内閣府(防災担当)災害応急対策担当により作成されたアフターアクションレポートの作成過程とその活用に関する検討を踏まえて—, 地域安全学会論文集, No. 10, pp. 573-782, 2008.11.

Quarantelli, E.L., Dynes, R.R. & Haas, J.E.: Organizational Functioning in Disaster: A Preliminary Report, University of Delaware Disaster Research Center, 1966.